

新儒教（1.1.1版）

【呼称】

彼はこの宗教を次のように呼ぶ。

- (1) 彼はこの宗教を新儒教と呼ぶ。
- (2) 彼は新儒教の信仰者を新儒教徒と呼ぶ。

彼は新儒教の略称を儒教と呼ぶ。彼は新儒教徒の略称を儒教徒と呼ぶ。

【宗教】

彼は宗教を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (1) 宗教は系（システム）である、かつそれは社会を形成する。
- (2) 宗教は人間競技系である。
- (3) 宗教は組式（プログラム）である。

彼はシステムの日本語訳を系や家、世界系や競技系とする。正確には、(2) はx教系統の人間競技系である。

【信仰】

彼は信仰するを次のように認識する。

- (1) 信仰するとは、ある行為である、かつある主体がある対象が実際的であると考ええる。
- (2) 信仰するとは、ある行為である、かつある主体がある対象が正しいと考ええる。

日常的には、ある対象は見えないものや物質世界には存在しないものである。代表的な対象には、創造主や善悪が存在する。

【新儒教】

彼は新儒教を次のように認識する。

- (1) 新儒教は文明宗教である。
- (2) 新儒教は東洋文明に所属する。

彼は次の思考規範を信仰する。

- (3) もしある主体が新儒教徒であるならば、その主体は東洋文明に所属する。

彼は新儒教系の動力と動力源を次のように認識する、または信仰する。

- (4) 新儒教系の動力は目的力である。
- (5) 新儒教系の動力源は目的意志である。

目的力と目的意志は後述である。

【語族】

彼は新儒教における言語を次のように認識する、またはそう決定する。

- (1) 新儒教の言語は日琉語族及びシナチベット語族と朝鮮語族とアルタイ語族（諸語）とウラル語族の一部である。
- (2) 新儒教の言語は上記（1）の子孫である。
- (3) 新儒教の言語はモンゴロイド人種の言語、特に新モンゴロイド人種の言語である。

【人種】

彼は新儒教における人種を次のように認識する、またはそう決定する。

- (1) 新儒教における中心的な人種はモンゴロイド人種、特に新モンゴロイド人種である。
- (2) 新儒教の中心的な地域はモンゴロイド人種の自然な生息地、東洋地域である。

【設計者】

彼は新儒教の設計者を次のように認識する、または決定する。場合により、彼は設計者を創造者と呼ぶ。

- (1) 新儒教の設計者は人間界の創造者（設計者）である。
- (2) 新儒教の設計者は新儒教の統治者でない。
- (3) 新儒教の設計者は新儒教の統治者及び競技者によって保護される。

【修正】

彼は新儒教を次のように認識する。

- (1) この新儒教は否定されない。
- (2) この新儒教は連続的に修正・拡張・更新される。
- (3) この新儒教は連続的に整理整頓、理論化、一般化される。

彼は修正を次のように認識する。

- (4) もし新儒教徒が彼の認識1を修正するならば、その教徒は関数（認識1）のように修正す

る。

新儒教は世界に対する彼の認識を連続的に変化させる。

1.0 目的

【x教系統の目的】

彼は目的を次のように認識する。

- (1) 目的はある主体が実現するつもりであるある対象の存在や状態や運動である。
- (2) x教系統の目的はx教徒が信仰する目的である。
- (3) 新儒教における目的は新儒教系統の目的である。

【新儒教系統の目的】

彼は新儒教系統の目的を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 新儒教徒がより人間的な系を形成する。
- (2) 新儒教徒がより高次的な系を形成する。
- (3) 新儒教徒が宇宙を含む世界のどこでも永続的に機能する系を形成する。
- (4) 新儒教徒がより善な系を形成する。

日常的には、より高次的はより優れた存在やより良い存在、より善な存在になるでも良い。彼は日常的には、次の目的を認識する、決定する。

- (5) 新儒教徒がより礼節ある世界を形成する。

口語的には、彼らはより礼に沿った世界を形成する。その他は次である。

- (6) 新儒教徒が種としても遺伝的にも宗教的にも文明的にも永遠に生き残り続ける。

【新儒教系統の文明的な目的】

彼は新儒教系統の文明的な目的を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 新儒教徒が西欧文明及び西欧キリスト教及び異文明と新儒教で対峙する。
- (2) 新儒教徒が西欧文明よりも既存のどの文明よりもより素晴らしい文明を形成する。

また、彼は新儒教の文明的な目的を次のように契約する。

- (3) 新儒教徒がアメリカ大陸をアメリカ先住民とモンゴロイド人種のために奪還する。
- (4) 新儒教徒が人間界における、特にオセアニアやアメリカ大陸における白人帝国主義と植民地

主義と奴隷地主義と不可触民地主義を終了させる。

【権限】

彼は目的の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の目的を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の目的を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の目的を信仰者に授ける。

2.0 世界観

【世界観】

彼はこの世界を次のように認識する、または把握する、または信仰する。

- (1) 物質的なものが存在する。
- (2) 動物的なものが存在する。
- (3) 人間的なものが存在する。

また、彼はこの世界を次のように認識する、または把握する、または信仰する。

- (4) 物質的なものは完全に自動的に運動する。
- (5) 動物的なものは非自動的に運動する。
- (6) 人間的なものは目的的に運動する。

【3種類の何か】

彼はこの世界における3種類の何かを次のように認識する、または把握する、または信仰する。

- (1) 物質が存在する。
- (2) 視界のような感覚が存在する。
- (3) 視界をみる主体が存在する。

感覚も主体も物質でない。感覚は主体と異なる。(2)には、5感の他に、性欲や感情が存在する。

【物語】

彼は世界に関する物語を次のように認識する、または把握する、または信仰する。

- (1) 物質は完全に自動的に運動していた。

- (2) 動物が生まれた後、動物は非自動的に運動するようになった。
- (3) 人間が生まれた後、人間は目的的に運動するようになった。

【程度】

彼は～なものに関する程度を次のように認識する、または把握する、または信仰する。下記の連続は日常的な用語である。

- (1) 動物的なものは0か1でなく、連続的である。
- (2) 人間的なものは0か1でなく、連続的である。

【意志】

彼は意志を次のように認識する、または把握する、または信仰する、または仮定する、または仮定する。

- (1) 意志は能力である、かつその意志はある種類の運動を別の種類の運動に変化させる。
- (2) 意志は状態である。

彼は上記の(1)を応用して、彼は自由意志や目的意志を次のように認識する、または把握する、または信仰する。

- (3) 自由意志は能力である、かつかつその自由意志は自動的な運動を非自動的な運動に変化させる。
- (4) 目的意志は能力である、かつかつその目的意志は非自動な運動を目的的な運動に変化させる。

便宜的に、彼は次の機械意志を次のように認識する、または把握する、または信仰する。機械意志は自動意志でも良い。

- (5) 機械意志は能力である、かつかつその自由意志は無な運動を自動的な運動に変化させる。

無な運動が何であるのかは不明である。止まった状態を自動的な運動に変化させると仮定すると、その仮定が理論物理に反する可能性がある。そこで、彼は無な運動と置いた。

【力】

彼は力を次のように認識する、または把握する、または信仰する、または仮定する。

- (1) 力は原因である、かつその意志はある種類の運動を別の種類の運動に実際に変化させる。

彼は原因を作用に置き換える。彼は上記の(1)を応用して、彼は自由力や目的力を次のように認識する、または把握する、または信仰する。

(2) 自由力は原因である、かつかつその自由力は自動的な運動を非自動的な運動に実際に変化させる。

(3) 目的力は原因である、かつかつその目的力は非自動的な運動を目的的な運動に実際に変化させる。

便宜的に、彼は次の機械力を次のように認識する、または把握する、または信仰する、または仮定する。機械力は自動力でも良い。

(4) 機械力は原因である、かつかつその機械力は無な運動を自動的な運動に実際に変化させる。

【非自動的な運動の流れ】

彼は非自動的な運動の流れを次のように認識する、または把握する、または信仰する、または仮定する。

(1) ある主体が存在する。

(2) その主体は自動的に運動する。

(3) その主体は自由意志を持つ、つまり自動的な運動を非自動的に運動させることができる状態になる。

(4) その主体は自動的な運動を非自動的な運動に自由力で実際に変化させる。

(5) その主体は目的意志を持つ、つまり非自動的な運動を目的的に運動させることができる状態になる。

(6) その主体は非自動的な運動を目的的な運動に目的力で実際に変化させる。

(7) その主体は目的を実現する。

【権限】

彼は世界観の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

(1) 設計者のみがx教系統の世界観を創造する。

(2) 設計者のみがx教系統の世界観を決定する。

(3) 設計者のみがx教系統の世界観を信仰者に授ける。

3.0 人間

【人間】

彼は人間を次のように認識する、または信仰する。

(1) x教系統の人間はx教系統の人間性を持つ主体である。

(2) x教系統の人間はx教系統の人間性を設計者によって授けられた主体である。

主体は3種類の何かにおける(3)である。言い換えると、x教系統の人間はx教系統の人間性を持つサピエンスやそれに類似するヒトである。

彼は新儒教系統の人間を次のように信仰する。

(3) 新儒教系統の人間は新儒教系統の人間性を持つ主体である。

比喩的には、設計者が新儒教系統の人間性をサピエンスに導入して、人間を設計する、または人間を泥からでなくサピエンスから創造する。

(4) サピエンスはx教系統の人間でない。

(5) サピエンスは動物である。

彼はx教系統の人間を次のように信仰する。

(6) x教系統の人間は機械性を持つ肉体とある種系統の動物性を持つ感覚とx教系統の人間性を持つ主体との組みである。

機械性は物質性でも良い。ある種系統の動物性はサピエンスである。つまり、人間は物質的なものと動物的なものと人間的なものの組みである。

より日常的には、彼は次を信仰する。

(7) x教系統の人間はx教系統の人間競技に所属する、かつその競技を競技する主体である。

【人間の本質】

彼はx教系統の人間の本質を次のように信仰する。

(1) x教系統の目的力を持つ主体はx教系統の人間を動物から区別する。

(2) x教系統の目的意志を持つ主体はx教系統の人間を動物から区別する。

彼は日常的なx教系統の人間の本質を次のように信仰する。

(3) x教系統の善悪を持つ主体はx教系統の人間を動物から区別する。

(4) x教系統の認識を持つ主体はx教系統の人間を動物から区別する。

また、彼はx教系統の人間の本質を次のように信仰する。

(5) x教系統の自由力を持つ主体はx教系統の人間を動物から区別しない。

(6) x教系統の自由意志を持つ主体はx教系統の人間を動物から区別しない。

【人間性の剥奪】

彼はx教系統の人間性の剥奪に関する思考規範を次のように信仰する。

(1) もし設計者、または設計者階級が死ぬならば、x教系統の人間性はx教系統の人間から奪われる。

場合により、彼は設計者を創造者と言い換える。

【権限】

彼は人間の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の人間を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の人間を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の人間を信仰者に授ける。

4.0 自己

【自己】

彼は彼の自己を次のように把握する。

- (1) 自己は3種類の何かにおける(3)の主体である。
- (2) 自己は上記の主体と感覚と肉体の組みである。

【自己の人種】

彼は自己の人種や生物的事実を次のように認識する。

- (1) 彼はモンゴロイド人種である。
- (2) 彼は東洋小種である。
- (3) アメリカ先住民の人種はモンゴロイド人種である。
- (4) 東南アジア人の人種はモンゴロイド人種である。

また、彼は自己の人種的な視点を次のように認識する。

- (5) 彼の人種的な視点はモンゴロイド人種視点である。
- (6) 彼の小種的な視点は東洋小種視点である。

【文明と自己】

彼は彼の文明的な自己を次のように認識する。

- (1) 彼は彼の文明的な自己を東洋文明と認識する。
- (2) 彼は彼の宗教的な自己を新儒教と認識する。
- (3) 彼は東洋文明に所属する。

【自己形成】

彼は自己形成を次で実行する。

- (1) 彼は彼の文明的な自己を東洋文明で形成する。
- (2) 彼は彼の宗教的な自己を新儒教で形成する。

【権限】

彼は自己の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の自己を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の自己を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の自己を信仰者に授ける。

5.0 善悪

【善悪】

彼は善悪を次のように認識する、または信仰する。

- (1) 善は目的に沿う対象の存在及び状態、運動である。
- (2) 悪は目的に反する対象の存在及び状態、運動である。

なお、彼は現象も対象と認識する。彼は善悪を運動競技におけるレッドカードに例える。

- (3) x教系統の善悪はx教徒が持つ善悪である。
- (4) 新儒教系統の善悪は新儒教徒が持つ善悪である。

彼は善悪の性質を次のように信仰する。

- (5) 善悪は事実によって正当化されない。

たとえある主体が事実を提示するとしても、その事実は善悪を正当化しない。

【目的行為】

彼は目的行為を次のように信仰する。

- (1) 目的行為は行為である、かつそれはx教系統の善悪を持つ。
- (2) 目的状態は状態である、かつそれはx教系統の善悪を持つ。
- (3) 目的存在は存在である、かつそれはx教系統の善悪を持つ。

彼は行為を非自動的な運動や自由運動とする。同様に、彼は自由状態や自由存在を仮定する、または信仰する。彼は彼は次を信仰する。

- (4) 目的行為は行為に優越する。
- (5) 目的状態は自由状態に優越する。
- (6) 目的存在は自由存在に優越する。

【真理】

彼は真理を次のように信仰する。

- (1) 真理は唯一に正当化される善である。

または、真理は唯一に正当化される善悪である。悪の場合、悪と唯一に断定される。

【礼】

彼は新儒教系統の善悪を次のように信仰する。

- (1) 彼は礼に沿う対象の存在及び状態、運動を善と判断する。
- (2) 彼は礼に反する対象の存在及び状態、運動を悪と判断する。

彼は失礼と無礼と非礼を次のように信仰する。例えばサッカーである。

- (3) 失礼→笛（ファール）
- (4) 無礼→イエローカード
- (5) 非礼→レッドカード

【陰陽一体】

彼は新儒教系統の善悪を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が悪を彼に実行するならば、彼はより悪を実行する。

【思考規範】

彼は次の思考規範を信仰する。

(1) もしある主体が自己のx教系統の善悪を持っていないならば、その主体が存在や状態や運動の善を正当化する可能性は0である。

(2) もしある主体が自己のx教系統の善悪を持っていないならば、その主体が存在や状態や運動の悪を断定する可能性は0である。

【手引き化】

彼は善悪の使い方を次のように信仰する。

(1) 彼は善悪の判断を代数計算のように手引き化する。

彼は善悪の判断の順序を次のように信仰する。

(2) 彼は現象を知覚する。

(3) 彼は現象を認識する。

(4) 彼は現象の善悪を判断する。

【善悪と階級】

彼は善悪と階級を次のように信仰する。

(1) 任意の階級がx教系統の善悪を所有する。

(2) 統治者階級が下す善悪の判断は選手階級が下す善悪の判断よりも強い。

つまり、統治者階級が下す善悪の判断は選手階級が下す善悪の判断に優越する。

【善悪の使用の主体】

彼は善悪の使用の主体を次のように信仰する。

(1) 儒教系統の善悪を使用する主体は儒教徒である。

(2) x教系統の善悪を使用する主体はx教徒である。

(3) 彼は異教徒が儒教系統の善悪を使用することを無礼、または非礼と認識する。

【善悪の性質】

彼は善悪の性質を次のように信仰する。

(1) ある主体の位置は善悪及び善悪の判断を変化させる。

- (2) ある主体の方向は善悪及び善悪の判断を変化させる。
- (3) ある主体の歴史は善悪及び善悪の判断を変化させる。

言い換えると、善悪及び善悪の判断はある主体の位置に関係する。善悪及び善悪の判断はある主体の方向に関係する。善悪及び善悪の判断はある主体の歴史に関係する。

【権限】

彼は善悪の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の善悪を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の善悪を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の善悪を信仰者に授ける。

信仰者には、統治者階級と選手階級が存在する。

6.0 性

【性】

彼は性を次のように認識する、または把握する、または信仰する。

- (1) 動物的な性と人間的な性が存在する。

彼は動物的な性を次のように認識する。

- (2) 動物の雄が存在する。
- (3) 動物の雌が存在する。
- (4) サピエンスの雄が存在する。
- (5) サピエンスの雌が存在する。

彼はx教系統の人間的な性を次のように把握する、または信仰する。

- (6) x教系統の女が存在する。
- (7) x教系統の男が存在する。

【儒教系統の性】

彼は儒教系統の性を次のように認識する、または把握する、または信仰する。

- (1) 儒教系統の性は儒教徒が信仰する性である。

- (2) 儒教系統の男はサピエンスの雄と儒教系統の男の組みである。
- (3) 儒教系統の女はサピエンスの雌と儒教系統の女の組みである。

上記を区別する時、彼は儒教系統の男 = (サピエンスの雄、儒教系統の男性) と表示する。彼は儒教系統の女 = (サピエンスの雌、儒教系統の女性) と表示する。

【性と認識及び信仰】

彼は性を次のように認識する、または信仰する。

- (1) 雄は雌と異なる。
- (2) 儒教系統の男は儒教系統の女と異なる。
- (3) 雄と雌は互いに平等でない。
- (4) 儒教系統の男と儒教系統の女は互いに平等でない。

(1) と (3) は儒教系統の認識である。(2) と (4) は儒教系統の信仰である。

【性の区別及び分岐、自立】

彼は性を次のように信仰する。

- (1) 彼は雄と雌を区別する。
- (2) 彼は儒教系統の男性と儒教系統の女性を区別する。
- (3) 彼は雄と雌を分岐させる。
- (4) 彼は儒教系統の男性と儒教系統の女性を分岐させる。
- (5) 儒教系統の男性と儒教系統の女性を互いに自立させる。

【性の区別の具体例】

彼は性の区別の具体例を提示する。

- (1) 儒教系統の男性の目的と儒教系統の女性の目的が存在する。
- (2) 儒教系統の男性の世界観と儒教系統の女性の世界観が存在する。
- (3) 儒教系統の男性の人間と儒教系統の女性の人間が存在する。
- (4) 儒教系統の男性の自己と儒教系統の女性の自己が存在する。
- (5) 儒教系統の男性の善悪と儒教系統の女性の善悪が存在する。

その他には、次がある。

- (6) 儒教系統の男性の認識と儒教系統の女性の認識が存在する。
- (7) 儒教系統の男性の判断と儒教系統の女性の判断が存在する。

【権限】

彼は性の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の性を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の性を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の性を信仰者に授ける。

7.0 富

【富】

彼は富を次のように信仰する。

- (1) x教系統の富はx教徒が所有する富である。
- (2) 儒教系統の富は儒教徒が所有する富である。

また、彼は富を次のように認識する、または信仰する。

- (3) x教系統の富はx教系統の社会形成及び社会系（システム）に必要である。
- (4) x教系統の富はx教系統の社会形成及び社会系（システム）の原因でない。

彼は上記の社会系を文明系や宗教系に置き換える。または、彼は系と単に呼ぶ。さらに、彼は富を次のように認識する、または信仰する。

- (5) 基本的には、x教系統の富はx教系統の社会系に所属する。

【所有】

彼は所有を次のように信仰する。

- (1) x教系統の所有はx教徒が実行する所有である。
- (2) 儒教系統の所有は儒教徒が実行する所有である。

彼は所有の主体を次のように信仰する。

- (3) 所有の主体は上記「3種類の何か」の(3)における主体である。
- (4) 特に、所有の主体はx教系統の人間性を持つ主体である。

彼は富の儒教系統の定義を次のように信仰する。

- (5) x教系統の富はx教徒がx教系統の所有で所有する対象である。

なお、対象には、物体や現象も存在する。

【富の善悪】

彼は富の善悪と所有の善悪を次のように信仰する。

- (1) x教系統の富の善悪はx教系統の善悪によって正当化（断定化）される。
- (2) x教系統の富の所有はx教系統の善悪によって正当化（断定化）される。

【富の性】

彼は富の性を次のように信仰する。

- (1) 彼はx教系統の男系富をx教系統の女系富から区別する。
- (2) 彼はx教系統の男系所有をx教系統の女系所有から区別する。
- (3) 彼は儒教系統の男系富を儒教系統の女系富から区別する。
- (4) 彼は儒教系統の男系所有を儒教系統の女系所有から区別する。

x教系統の男系富はx教系統の男のx教系統の富である。

【人間と所有】

彼は人間の所有を次のように信仰する。

- (1) 彼はx教系統の人間及び人間の集合を売り買いしない。
- (2) 彼はx教系統の人間を直接的に所有しない。

【富の保護】

彼は富の保護を次のように信仰する。

- (1) もしある儒教徒が自己の儒教系統の社会を作るつもりがないならば、その主体の富は保障及び保護されない。
- (2) もしある儒教徒が創造主の儒教系統の目的に反するならば、その主体の富は保障及び保護されない、かつ正当に没収される。

【富の剥奪】

彼は富の剥奪を次のように信仰する。

- (1) もし設計者、または設計者階級が減じるならば、x教系統の富のx教系統の所有は解除される。

上記の設計者は創造者でも良い。

【富の取り扱い】

彼は富の取り扱いを次のように信仰する。

- (1) x教徒はx教系統の富をx教系統の目的及び目的力で目的的に取り扱う。

【設計者と富の所有】

彼は設計者による富の所有を次のように信仰する。

- (1) 理論的には、設計者が儒教系統の全ての富を儒教系統の所有で所有する。
- (2) 設計者はその富を儒教徒に貸す。

また、彼は系の所有を次のように信仰する。

- (3) 設計者のみがこの儒教系（システム）を永続的に所有する。
- (4) 設計者はその系を売り買いしない。

さらに、彼は使用料を次のように信仰する。

- (5) 理論的には、設計者が儒教系統の富及び所有の使用料を取る。

【自然な土地の所有】

彼は自然な土地の所有を次のように認識する、または信仰する。

- (1) アメリカ大陸及びその上の資源は西欧白人の富でない。
- (2) アメリカ大陸及びその上の資源は比較的的自然なモンゴロイド人種の富である。

ただし、(1) 及び (2) は儒教系統の認識である。彼は自然な土地の所有を次のように信仰する。

- (3) モンゴロイド人種がアメリカ大陸及びその上の資源を比較的に自然に多重に所有する。
- (4) 自然なサピエンスがその下の自然な土地及びその上の資源を比較的に自然に多重に所有する。

【富の具体例】

彼は富の具体例を次のように信仰する。

- (1) x教系統の言語
- (2) x教系統の認識
- (3) x教系統の善悪
- (4) x教系統の判断
- (5) x教系統の人間性
- (6) x教系統の自己
- (7) x教系統の性
- (8) x教系統の富

正確には、富は所有や富に対する認識や判断や定義、その他である。その他にも、x教系統のyが存在する。

【権限】

彼は富及び所有の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の富及び所有を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の富及び所有を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の富及び所有を信仰者に授ける。

8.0 法

【3種類の法】

彼は次の3種類の法を認識する、信仰する。

- (1) 物質法は法である、かつ物質的なものの存在と状態と運動を定める。
- (2) 動物法は法である、かつ動物的なものの自由存在と自由状態と行為を定める。
- (3) 人間法は法である、かつ人間的なものの目的存在と目的状態と目的行為を定める。

物質法には、物理法則や機械に対する組式（プログラミング）が存在する。動物法には、ある種の動物に適合した法（習性や慣習、時に本能）や自由意志による法が存在する。人間法には、善悪を持つ法が存在する。

- (4) 人間法は法である、かつx教系統の善悪を持つ。

彼はx教系統の人間法をx教系統の善悪法、またはx教系統の目的法を便宜的に呼ぶ。

- (5) 動物法は動物的な性を持つ。
- (6) 人間法は人間的な性を持つ。

(7) x教系統の人間法はx教徒が信仰する人間法である。

【法と契約】

彼は契約を次のように信仰する。

(1) 契約はある系（システム）における法である。

彼は次の思考規範を信仰する。

(2) もしある競技系が存在しないならば、ある契約は存在しない。

競技系はある系でも良い。彼は契約を次のように設計する（創造する）。下記の契約は目的契約である。

(3) ある主体aとある主体bが系を目的意志及び目的力で設計する。

(4) ある主体aとある主体bがその系に所属することを目的意志で合意する。

(5) ある主体aとある主体bがその系における法に沿って目的的に運動する。

【法の自然性】

彼は法の比較的な自然性を信仰する。

(1) 法には、比較的に自然な法と比較的に不自然な法が存在する。

(2) 比較的に自然な法は比較的に不自然な法に優越する。

【法の目的】

彼は法の目的を信仰する。

(1) 法の目的の一つは統治である。

(2) 法の目的の一つは秩序形成である。

【権限】

彼は法の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

(1) 設計者のみがx教系統の（根本的な）法を創造する。

(2) 設計者のみがx教系統の（根本的な）法を決定する。

(3) 設計者のみがx教系統の（根本的な）法を信仰者に授ける。

9.0 死生観

【死生観】

彼は死生観を次のように信仰する。

- (1) x教系統の死生観はx教徒が信仰する死生観である。
- (2) 儒教系統の死生観は儒教徒が信仰する死生観である。

彼は死生観の性を次のように信仰する。

- (3) x教系統の母系死生観が存在する。
- (4) x教系統の父系死生観が存在する。

彼は儒教系統の生と儒教系統の死を次のように信仰する。

- (5) ある儒教徒が生きているとは、彼が儒教系の中で競技していることである。
- (6) ある儒教徒が死ぬとは、彼が儒教系から退場することである。

場合により、彼は競技を所属すると置き換える。

【個と集団】

彼は生と死における個と集団を次のように信仰する。

- (1) 個人的な死と集団的な死が存在する。
- (2) 個人的な生と集団的な生が存在する。

彼は生と死を次のように信仰する。

- (3) 儒教系統の人間の死は個人的な（儒教系統の）死と集団な（儒教系統の）死の組みである。
- (4) 儒教系統の人間の生は個人的な（儒教系統の）生と集団な（儒教系統の）生の組みである。

彼は生と死を個人と集団の二重性と信仰する。彼は儒教系統をx教系統へと一般化する。

【永続性】

彼は生の永続性を次のように信仰する。

- (1) 儒教系は永続的である。
- (2) 東洋文明系は永続的である。
- (3) 彼は集団としての永続性を上記の（1）と（2）で信仰する。

ただし、彼は個人に関しては次のように信仰する。

(4) もし肉体が崩壊するならば、肉体に対応する主体も消え失せる可能性がある。

【権限】

彼は死生観の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の死生観を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の死生観を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の死生観を信仰者に授ける。

10.0 刑罰

【刑罰の主体】

彼は刑罰の主体を次のように信仰する。

- (1) もしある主体がx教系統の刑罰を科すつもりであるならば、その主体はx教系統の善悪を持っている。
- (2) もしある主体がx教系統の刑罰を科すつもりであるならば、その主体はx教系統の善悪を正しく扱える。

口語的には、善悪を持つ主体が刑罰を科することができる。xを儒教と仮定する。

- (3) もしある主体が儒教系統の刑罰を科すつもりであるならば、その主体は儒教系統の善悪を持っている。
- (4) もしある主体が儒教系統の刑罰を科すつもりであるならば、その主体は儒教系統の善悪を正しく扱える。

【刑罰の目的】

彼は儒教系統の刑罰の儒教系統の目的を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の刑罰の目的は秩序の付与である。
- (2) 儒教系統の刑罰の目的は損害の相互性（作用反作用性）の埋め合わせである。
- (3) 儒教系統の刑罰の目的は敵及び反社会的集団、その他の淘汰及び退場である。

なお、刑罰の目的は何かを懲らしめることでない。

【3種類の刑罰】

彼は3種類の刑罰を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が物質的であるならば、その主体は機械に対する儒教系統の刑罰を科される。
- (2) もしある主体が動物的であるならば、その主体は動物に対する儒教系統の刑罰を科される。
- (3) もしある主体が人間的であるならば、その主体は人間に対する儒教系統の刑罰を科される。

彼は (1) を物質刑罰と呼ぶ。彼は (2) を動物刑罰と呼ぶ。彼は (3) を人間刑罰と呼ぶ。

【刑罰の性】

彼は刑罰の性を次のように信仰する。

- (1) x教徒の女系統の刑罰が存在する。
- (2) x教徒の男系統の刑罰が存在する。

【刑罰の正当性】

彼は刑罰の正当性に関する思考規範を次のように信仰する。

- (1) もしx教系統の刑罰がx教徒に対する正当性を持たないならば、その刑罰は暴力や殺害である。

【刑罰の対象】

彼は刑罰の対象を次のように信仰する。

- (1) 刑罰の対象は存在である。
- (2) 刑罰の対象は状態である。
- (3) 刑罰の対象は運動である。

【刑罰と損害】

彼は刑罰に関する思考規範を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が損害をある対象に与えるならば、その主体はその損害に関する刑罰を加えられる。
- (2) もしある主体が損害をある対象に与えないならば、その主体はその損害に関する刑罰を加えられない。

彼は損害を次のように信仰する。

- (3) x教系統の損害はx教において計算される損害である。

(4) 儒教系統の損害は儒教において計算される損害である。

(5) もしある主体が儒教系統の刑罰に科されるならば、その主体は儒教系統の損害を別の主体に加えている。

【権限】

彼は刑罰の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

(1) 設計者のみがx教系統の刑罰を創造する。

(2) 設計者のみがx教系統の刑罰を決定する。

(3) 設計者のみがx教系統の刑罰を信仰者に授ける。